



# 新人を 迎えて

社会医療法人 近森会 副理事長  
近森病院 院長

川井 和哉

かわい かずや



## はじめに

本年も、近森会に多くの新たな仲間を迎えることができ、大変嬉しく思います。新入職員の皆さん、入職おめでとうございます。心より歓迎いたします。皆さんが加わることで、当会はさらに活気づき、地域医療を支える力が一層強くなります。これから一緒に、高知の医療を支え、県民にとって「頼りになる病院」をつくっていきましょう。

## 近森会の現在地

近森会は、高度急性期から回復期、在宅支援まで、切れ目のない医療を提供する高知の基幹病院として歩んできました。また、以前から地域の医療機関と協力し医療連携を積極的に推進しています。

現場では、医師・看護師の周辺業務を多職種へ委譲し、専門職が本来の業務に集中できる体制をさらに強化してきました。多くの医療専門職が常駐し、それぞれの視点で患者さんを診て、判断し、介入する「近森方式のチーム医療」は、全国的にも注目されています。

## 社会人としての第一歩

社会人としての生活は、学生時代とは大きく異なります。教科書通りにいかないことも多く、覚えることもたくさんあります。分からないことがあって当然です。どうか遠慮せず、先輩たちに質問してください。

近森会には、充実した研修体制と、面倒見の良い先輩たちがいます。皆さんが安心して成長できる環境を整えていますので、どうか前向きに挑戦してください。

そして、社会人として最も大切なのは「元氣な挨拶」と「報告・連絡・相談」です。これはどんな職種でも共通する基本であり、信頼関係を築く第一歩です。

## 2025年度を振り返って

診療報酬改定や医師の働き方改革の本格施行など、2024年は医療界にとって大きな転換点となる年でした。続く2025年度は、医療を取り巻く環境がさらに大きく変化した一年でした。高齢化の進行と人口減少、働き手不足、医療制度の見直しなど、地域医療はこれまで以上に複雑な課題に直面し、厳しい局面を迎えています。

こうした状況の中でも、職員は柔軟に対応し、職種を越えた協力体制で日々の医療を支えてきました。近森の最大の強みは「ヒト」であり、皆さん一人ひとりの力が病院を支えていることを実感しています。

改めて、職員みんなの努力に深く感謝しています。皆さんも今日からその一員となります。どうか安心して、そして誇りを持って歩み始めてください。

## 2026年度に向けて

これまで積み重ねてきた取り組みをさらに確かなものにしていく一年になります。

- 医療DXの推進
- 業務改善の加速
- 多職種連携のさらなる強化
- 働き方改革に沿った勤務環境の整備

▶  
近森会グループ  
2025年度を  
振り返って



2025-2026



より効率的で質の高い医療を提供する体制を整え、働きやすい職場づくりを一歩ずつ進めていきます。また、地域医療の変化に柔軟に対応しながら、それぞれが果たすべき役割を明確にし、確実に実行していくことが求められます。

変化の大きい時代だからこそ、私たちは「患者さんにとって最良の医療とは何か」という原点を忘れずにいたいと思います。新しい取り組みには困難もありますが、それ以上に大きな成長と達成感があります。皆さんの新しい視点や発想が、当会の未来をつくる力になります。

また、地域医療は今後ますます「機能分化と連携」が重要になります。近森病院は高度急性期医療に機能を集中し、グループ内外の医療機関と強固な連携を築きながら、高知の医療を支えていきます。

12月には近森病院開設80周年を迎えます。様々な企画を準備していますので楽しみにしてください。

## 高価値の医療を提供する

これからの医療には、「より大きな成果を、より少ない時間とコストで生み出す」ことが求められます。患者さんにとって本当に

価値のある医療とは何か——その視点を常に持ち続けてください。

医療は社会のライフラインであり、どんな状況でも必要とされます。同時に、若い世代の雇用の場としても重要な役割を担っています。この使命を胸に、地域医療に貢献していきましょう。

## さいごに

私たちの目標は、患者さんが一日でも早く良くなり、住み慣れた地域で元の生活を取り戻すことです。そのために、医師、看護師、医療専門職、事務、クラーク、アテンダント、清掃スタッフまで、すべての職員が同じ方向を向いて働いています。

医療職というやりがいのある仕事を通じて、人として成長し、皆さんの人生が豊かで充実したものになることを願っています。皆さんの活躍を心から期待しています。



# 2026年度 近森会グループ各施設の目標

## 社会医療法人 近森会 **生き残る**

理事長 入江 博之 いりえ ひろゆき



現在、全国の約7割の病院が赤字といわれています。医療・介護の提供体制は、かつてなく厳しい状況にあります。国公立病院には多額の補助金が支給される一方、民間病院にはそうした支援はありません。そのような環境の中でも、近森会グループは地域に根ざし、生き残り続けたいと考えています。近森会グループだけでなく、地域医療連携推進法人「高知メディカルアライアンス」を構成する病院・医院・訪問診療とも一体となり、地域に貢献する医療グループであり続けます。

加えて、大規模災害が発生した際にも「生き残り」、地域の方々を守る存在であり続けたいと思います。



●「空の架け橋」プロジェクト進行中

津波から薬剤を守る「新棟」と、建物間を繋ぐ「空中通路」のイメージ。今年6月末、完成予定。



## 近森病院

## 高度急性期医療を通じて地域医療に貢献する

院長 川井 和哉 かわい かずや



24時間365日、高知の高度救命救急医療を守り、困ったときに頼りになる病院であることが求められています。当院の宝はヒト(職員)です。

2026年度は、これまで積み重ねてきた取り組みをさらに確かなものにしていく一年になります。医療DXや業務改善を通じて、より効率的で質の高い医療を提供する体制を整え、働きやすい職場づくりを一步ずつ進めていきます。また、地域医療の変化に柔軟に対応しながら、当院が果たすべき役割を明確にし、確実に実行していきます。

変化の大きい時代だからこそ、私たちは「患者さんにとって最良の医療とは何か」という原点を忘れずにいたいと思います。高知の医療に貢献できるよう職員一丸となって進んでいきましょう。



## 近森リハビリテーション病院 生活再建を支えるリハビリテーションの 原点に立ち返る

院長 和田 恵美子 わだ えみこ



診療報酬改定により、回復期リハビリテーション病棟には早期受け入れと在院日数の短縮、そして確かな機能回復がこれまで以上に求められています。

人口減少と高齢化が進む高知県では決して容易ではありませんが、私たちは「生活再建を支える」リハビリテーションの原点にあらためて立ち返ります。近森会内にとどまらず地域の急性期病院と連携し、退院後も安心して暮らせるよう在宅部門とも力を合わせ、将来にわたり安定して運営できるよう、この一年全力で取り組んでまいります。



## 近森オルソリハビリテーション病院 柔軟性 ～flexibility～

院長 鄭 明守 てい あきもり



2024年から整形外科専門医2名、循環器内科専門医1名、内科医1名の陣容となり、整形外科疾患のみでなく、内科疾患の治療後の患者さんにも療養していただけるようになりました。2025年度は急性期病院からの転院に加え、レスパイト入院や在宅、ERからの直接入院への対応も軌道にのり、さらに幅広く対応が可能となりました。

今年度はさらに在宅系施設との連携も強化し、小回りがさく当院の強みをいかして地域医療に貢献していきたいと思えます。



## 社会福祉法人 ファミージュ高知 地域のなかで、その人らしい毎日を支えて

高知ハビリテリングセンター センター長 西岡 由江 にしおか よしえ



社会福祉法人ファミージュ高知では、高知ハビリテリングセンター（以下、ハビリ）と、しごと・生活サポートセンターウエーブ（以下、ウエーブ）の事業を通じて、障害のある方々が自分らしく暮らし、地域のなかで安心して過ごせるよう支援を続けています。

迎える2026年度は、これまでの積み重ねを大切にしながら、「利用者さん主体の支援」や「地域にひらかれた事業づくり」をさらに進めていきたいと考えています。19年目となるハビリ、20年目を迎えるウエーブが、これからの時代に合った役割を果たしていけるよう、職員の学びやチームづくりにも力を入れていきます。

これからも一人ひとりの歩みに寄り添い、「ここに来てよかった」と感じてもらえる場所であり続けるよう、法人全体で丁寧な活動を進めてまいります。



# 近森病院 開設80周年記念事業 がスタートします。



社会医療法人近森会 理事長  
入江 博之  
いりえ ひろゆき

## 12月24日は、近森病院開設80周年

近森病院は、1946年12月24日に近森外科としてスタートし、本年、2026年12月24日に開設80周年を迎えます。1964年の救急病院告示以降、「救急の近森」として24時間365日体制で地域医療を支え続け、2009年には災害拠点病院、2011年には救命救急センターに指定されるなど、高知県の医療を守る最後の砦として歩みを重ねてまいりました。

そんな近森病院の80周年記念事業は、長年にわたり近森を支えてくださったすべての皆さまへの感謝を表す取り組みです。同時に、私たちが受け継いできた理念や志の意味をあらためて胸に刻む機会でもあります。

本周年事業では、「つなぐ」をキーワードに掲げます。先人たちが築いてきた歴史と想いを、いまを担う私たちがしっかりと受け取り、この先の未来へと手渡していく。その意志を、この一年を通して形にしていきます。事業期間は本年4月1日から12月31日までの9か月間です。この特別な時間を近森のこれまでとこれからを「つなぐ」力強い歩みの期間にしていきたいと思います。

80周年  
記念事業  
第1弾

## 80周年記念ロゴマークの決定

第1弾として、職員および協力会社の皆さまから周年ロゴマークのデザインを募集し、熱のこもった75作品ものご応募をいただきました。どの作品にも、近森病院の歩みへの敬意や未来への希望が込められており、力作ぞろいとなりました。

これらの作品は、80周年事業検討委員会にて

厳正な審査を行い、最も多くの支持を集めた市原さんの作品を、近森病院80周年記念ロゴマークとして決定いたしました。

多くの皆さまにご参加いただきましたこと心より御礼申し上げます。

### ロゴマークに込めた想い

臨床検査部 臨床検査技師 市原 由佳  
いちばら ゆか

本ロゴマークは、地域とともに歩んできた「歩み」とこれから未来へと続く「発展」を表現しました。

「80th」と「CHIKAMORI HOSPITAL」を囲む円の形は、地域とのつながりや支え合いが循環し続ける姿を象徴し、医療や活動を通じて地域と関わり合いながら、その関係が絶えず巡り広がっていくことへの願いを込めています。

また、円の右上に設けた開口に見える部分はこれまでの歴史の先にある「未来への広がり」を想像しています。長く積み重ねてきた歩みを大切にしながらも、新しい挑戦や可能性に向かって進み続ける姿勢を表しました。円の上部のゴールドは積み重ねてきた歴史と誇りを、下部にはコーポレートカラーのブルーを配色し、両者が合わさることによってこれまで築いてきた歴史と信頼を土台に、未来へとつながる周年の節目を表現しました。

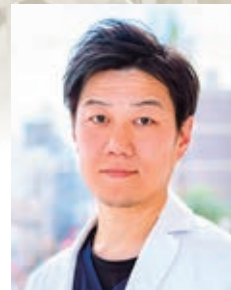


# 卒後臨床研修評価機構の [JCEP] 認定更新

2025年11月27日



初期臨床研修管理委員会 委員長／ 三木 俊史  
近森病院 救急科 科長  
みき としふみ



昨年11月に、卒後臨床研修評価機構(JCEP)の認定更新審査を受審し、認定(4年)の更新をいただきました。3回連続のエクセレント賞とはなりませんでしたが、当院の臨床研修プログラムは、環境・システムともに高い水準で確立されたものであると自負しております。

評価のまとめでは、当院の臨床研修が、柔軟な研修プログラムのもと、研修医が指導医や事務担当者とは相談しながら主体的に研修内容を組み立てられる点や、全研修医が学会発表を経験している点など、教育に対する高い意欲と組織的な支援体制が評価されました。さらに、診療部門に加え、薬剤部門・検査部門を含めた相互評価やフィードバックが活発である点も、研修の質向上に寄与しているとのコメントをいただきました。上級医・指導医をはじめ、メディカルスタッフ、病院全体で初期臨床研修に取り組んでいることを、改めて実感する機会となりました。

今後は、指摘いただいた課題も踏まえ、研修内容のさらなる充実に取り組むことで、より質の高い臨床研修病院を目指してまいります。最後に、今回の受審にご協力いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。



## 新たな始まり

近森病院附属看護学校 卒業生 氏原 麻喜 うじはら まき

3月6日、私たち9期生37名は多くの方々を支えられながら、無事に卒業式を迎えることができました。この学校で過ごした3年間は、9期生だからこそのことのできた思い出であふれています。勉強も学校行事も常に全力で取り組み、時にはぶつかることも

ありましたが、それも私たちの団結力を強くしてくれました。卒業は終わりではなく、新たな始まりでもあります。これからは看護の担い手として、それぞれの場所で努力を重ねていきます。今後とも温かく見守っていただけると嬉しいです。



## 近森病院 看護師特定行為研修 指定研修機関

# 開設10周年

## 記念講演会

2026年2月7日

### 看護師特定行為研修の 修了者、指導医、管理委員らが一堂に



近森病院 看護師特定行為研修責任者  
兼 看護DX推進部 部長

吉永 富美 よしなが ふみ

#### 156名が参加

近森病院の看護師特定行為研修は、指定研修機関の開設から10周年を迎えました。これを記念し、2026年2月7日に講演・交流会を開催。会場・Web合わせ156名が参加しました。

#### 特定行為の価値を見つめて

第1部の講演では、川井院長、臨床栄養部 宮島部長、そして現場で奮闘する立石麻酔特定看護師が登場。それぞれの視点から「特定行為の価値」が語られました。単なる業務分担に留まらず、チーム医療の質を底上げし、患者さんへのタイムリーなケアに直結していることを再確認する貴重な機会となりました。



第2部の記念講演では、当院の研修立ち上げに尽力いただいた水戸済生会総合病院の診療看護師であり、ラプタープロジェクト社の青柳智和氏をお招きし、心に響くご講演をいただきました。その後の交流会では、修了者、指導医、管理委員らが一堂に会し、所属を越えて親睦を深めました。

#### 次の10年もさらに

開催にあたりご尽力いただいた関係者の皆様、そして日頃から特定看護師を温かく支えてくださる現場の皆様に、心より感謝申し上げます。次の10年に向け、さらに質の高い看護師特定行為研修の実施を目指してまいります。

#### 第1部

「多職種から見た  
特定行為研修修了看護師の役割と期待」



近森病院 院長  
川井 和哉

近森病院 臨床栄養部 部長  
宮島 功

「術中麻酔管理  
活動報告」

近森病院 麻酔科所属  
特定行為研修修了看護師  
立石 修久



#### 第2部・記念講演

「特定行為研修開始から10年、  
解決できた課題と残った課題、今後の方策」

水戸済生会総合病院  
診療看護師/  
株式会社  
ラプタープロジェクト  
代表取締役  
青柳 智和氏



# 第7回 近森会グループ 学術集会

2026年2月21日

## あらたなる一步

近森病院 感染症内科 部長 石田 正之  
いしだ まさゆき



2026年2月21日に第7回近森会グループ学術集会を開催しました。今回は口演、ポスター併せて25題と昨年同様、多くの演題を頂き、参加者も90名にのびりました。

様々な職種の方から、日頃の業務や委員会活動を通しての、多岐にわたる内容の演題が発表されました。一部では時間を超過してしまうほどの活発な討議が行われ、参加者の他職種

の活動への関心やモチベーションの高さを感じました。

今回のテーマである「Step Forward -勇往邁進(ゆうおうまいしん)-」を体現する、「一步先へ、力強く踏み出す」学術集会になったものと感じています。今回の成果をグループ内にとどまらず、地域へ、そして全国へと発信をしていく流れに繋がっていければと思っています。



### ■ 受賞者

受賞	演目	所属	氏名
最優秀演題賞	“見えない排泄”を見える化する挑戦 -ポータブルエコーを活用した排便ケアの実践-	近森病院看護部長室 看護師	小松 有希
座長賞	口演第一部 当院の緩和ケア外来および緩和ケアチームの活動報告	近森病院 緩和ケア委員会 看護師	島田 いづみ
	口演第二部 GEコマンドセンター導入に伴う ソーシャルワーカーの新たな取り組み -PA画面を活用した転院支援の動向と地域医療連携の変化に関する検討-	近森病院医療福祉部 地域医療連携センター ソーシャルワーカー	島崎 友映
	口演第三部 ICUから外来へ 補助循環を経験した患者における場をつなぐ看護の実践	近森病院ICU病棟 看護師	齋坂 美賀子
	ポスター 特定行為研修10周年を迎えて -修了者支援と院内活動促進への取り組み-	近森病院 看護DX推進部 看護師	吉永 富美

テーマ Step Forward -勇往邁進-

ゆうおうまいしん



## 講演会

### 地域医療連携推進法人 高知メディカルアライアンス 講演会

#### 『急性期病院における意思決定支援と生命維持治療の終了』

東京ベイ・浦安市川医療センター 救急・集中治療科 集中治療部門 部長 / 則末 泰博先生  
 呼吸器内科 部長 / 副センター長

則末 泰博先生

のりすえ やすひろ

〈2026年1月16日 / 管理棟会議室(オンライン配信有)〉



講演会には会場・Web視聴合わせ、78名が参加した。下の記念写真の前列中央が講師 則末先生、その左が筆者で、当日座長を務めた。



### 近森病院 救急科 科長 矢崎 知子 やざき ともこ

「私たちの医療のゴールは他の何でもなく患者さんの中にある」。則末先生にご講演いただき、急性期医療においてもACPを実施し、患者さんの人生観・価値観を知ることがを怠らず、Shared decision-making(共同意思決定)へつなげる重要性を再認識しました。

ゴールが緩和であれば、急性期病棟でも「苦痛を与えるリスクを最小限にするケア」を追求すべきです。今年公開される4学会合同ガイドラインでは、緩和医療の重要性と患者さん中心の意思決定が強調されます。則末先生のご講演では、毎回新たな気づきが得られ、次に取り組むべきことが見えてきます。

今後チームで課題に向き合い、患者さん中心の医療をさらに深めていきます。

## 論文掲載

### 完全房室ブロックを契機に、心室細動による心肺停止に至ったたこつぼ症候群

近森病院 循環器内科 橋本 温子 はしもと あつこ

#### 論文名

Takotsubo syndrome presenting as ventricular fibrillation cardiopulmonary arrest coupled with complete heart block (心室細動による心肺停止および完全房室ブロックを合併して発症したたこつぼ症候群)



↑ 閲覧はこちら

#### 掲載誌

Journal of Cardiology Cases Volume 33, Issue 1p23-26 January 2026



この度、完全房室ブロックを誘因としてたこつぼ症候群を発症し、心室細動に至った稀な症例をJournal of Cardiology Cases誌に報告しました。臨床現場では、蘇生直後の不安定な循環動態に対し、緊急カテや一時的ペースメーカー植え込みなど、状況に応じた的確な介入が求められる経験となりました。

本症例から学んだのは、詳細な問診が病態解明の鍵となることです。回復後の対話から発症前の徐脈を捉えたことが、房室ブロックが本症を誘発したという考察の核心となりました。初めての英語論文執筆を通じ、一例の経験を論理的に整理し、広く共有する責務を再確認しました。執筆にあたりご指導いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

## 職員募集



詳しくは、近森会グループHPの採用ページをご覧ください。



3,000とおりの誇れる仕事

#### 募集職種

- 医師
- 薬剤師
- 看護師
- 診療放射線技師
- 介護福祉士
- 臨床検査技師
- 救急救命士
- 事務

看護部

## 新人看護師研修「振り返りの会」

2026年2月19日

## 応援を得て一歩ずつ

看護部 キャリア開発課 看護師長 久保 博美 くぼ ひろみ



2025年度新人看護師研修「振り返りの会」を実施しました。昨年同様、各出身学校にもご案内し、5校から10名の先生方がご参加くださいました。

先生から成長を確認したメッセージをいただけたことや、先輩たちから苦勞しつつも頑張っていることを応援メッセージで手渡してもらえたことで、改めて多くの方がみてくれていたことを知り、涙ぐむ姿もみられました。「とても感動した」「また頑張ろうと思えた」とアンケートにも記されていました。

1年目は楽しいことばかりとはいかず、自分の存在を小さく感じたり、道に迷う場面もありました。しかし必ず応援者がおり、みていてくれることをしっかり受け止めた場となりました。

今後も患者さんのためにますます力を発揮していく姿を楽しみに、成長を後押ししていきます。



▲次年度新人看護師へのメッセージも作成しました。

## すまいる♥ナース通信 # 専門看護師

専門性を活かした  
排泄ケアの新たな取り組み

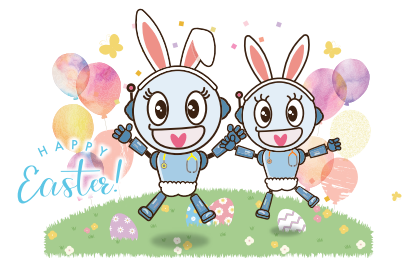
看護部 統括看護部長／老人看護専門看護師

岡本 充子 おかもと じゅんこ

老人看護専門看護師として高齢者ケアの専門性を持ちながら看護管理者も務める全国5病院(当院含む)において、ワイヤレス超音波画像診断装置「iViz air」デモ機を用いた排泄ケアの実践・浸透プロジェクトを6か月間実施しました。

当院では、がん看護専門看護師と認知症看護認定看護師を「エコーナース」に選出。排便状況を可視化することで、根拠に基づいた的確なアセスメントが可能となり、不要な処置の削減や多職種間の共通理解の促進、患者さんのQOL向上につながる事が確認されました。

このプロジェクトの成果を受け、当院では同装置2台を本格導入し、排泄ケアのさらなる充実を図っていきます。今後も管理者・専門職の両面から、看護の質向上につながる取り組みを推進していきたいと思っております。



近森会グループ看護部 マスコットキャラクター モリンちゃん



iViz airの勉強会。お腹に超音波プローブを当て、スマートフォン型の本体で体内の便の状況を確認。

# 災害に備えて

近森病院

2026年1月25日

## 災害対応訓練2025

Report  
1

危機管理部 災害対策室 主任／  
災害対策委員／日本DMAT業務調整員  
松本 圭司 まつもと けいし

今年度の訓練は、南海トラフ地震の発生および大津波警報の発令を想定し、災害対策本部を立ち上げ、津波襲来までの1時間以内に、1・2階フロアにいる人々を3階へ避難誘導するという内容で実施しました。

通信手段が限られた状況下において、災害対策本部がトリアージエリアや病棟、そして外部機関とどのように情報伝達を行うかという難しい課題に取り組み、多くの課題を明らかにすることができました。

津波襲来が予想される中で、いかに迅速に本部体制を整えることが重要であるかを再確認でき、非常に有意義な訓練であったと思います。今後も色々な勉強会や研修、そして訓練を企画していきたいと思います。ぜひご参加ください。



災害対策本部訓練

Report  
2

近森病院 放射線科 看護師 主任／  
災害対策委員  
坂本 明美 さかもと あけみ

災害対策本部訓練と並行して、トリアージ訓練および仮想病棟での籠城対応訓練を実施しました。

トリアージ訓練では、来院した患者さん・ご家族・職員等が多数負傷した状況を想定。津波からの避難を想定し、上層階にトリアージエリアを設置して実施するとともに、傷病者リストの作成を行いました。模擬患者役のスタッフも配置し、実動形式で実施しました。

籠城訓練では、仮想病棟や模擬患者を準備し、災害時の対応を実動で行いました。津波浸水により長期間の籠城となった場合を想定し、病棟内で起こり得る事象を複数設定しました。実際に体験することで、現時点で考えられる最善の対応方法について検討しました。



トリアージ訓練



籠城訓練

全体まとめ

同一想定による2部構成で実施したため、第1部での反省点を直ちに第2部で改善することができました。参加者からも「実践的な訓練であった」との声が多く寄せられました。

## 災害時の、安全で衛生的なトイレ利用を考える

2026年2月19日

高知県の災害医療救護体制強化事業費補助金を活用し、災害用のトイレとテントを購入しました。これを受けて、多職種が参加する感染リンクスタッフ委員会WG「災害時の感染対策チーム」による体験型勉強会を開催。実際の災害時、より安全で衛生的に使うためにどうすべきか、メンバー間で活発な議論が交わされました。





# ドイツ留学 Report vol.5

Bonn大学病院(留学中)  
循環器内科 菅根 裕紀 すがね ひろき



患者さんの待機室。ここを活用することで半日で大体8件(TAVI 6件、MTEER 1件、TTEER 1件)をこなすことができます。最近では症例が増えて、こちらの1日＝近森病院の1ヶ月くらいの数になっています。



まだ新しくなった頃のハイブリッドオペ室。同じものが2つあります。毎日それぞれ5件は使うので、どんどん年季が入ってきています。

## —— 新ハートセンター始動 ～手技のライブ配信と成長の実感～ ——

### 新ハートセンターとライブ配信

みなさんお疲れ様です。菅根です。こちらでは、今月から新しいハートセンターでの治療が始まりました。ハイブリッド手術室(※)が2つになって、今までの2倍の速さで症例が回るのかと思いましたが、現実はまだ1.3倍くらいでしょうか。それ以上に、新しい設備になり物品がどこにあるかが全く分からないので、現場はてんやわんやです。

そんな中、ハートセンターのお披露目を兼ねた手技のライブ配信として、日本でも今年から導入される予定のTTEER(三尖弁のカテーテル治療)と、すでに日本で導入済みのMTEER(僧帽弁のカテーテル治療)を1例ずつ行いました。さて、ライブ配信が終わると他のみんなは打ち上げに行ってしまう、教授と2人でTTEERを担当することになりました。

### 異国の現場で実感する自分の成長

ライブ配信が上手くいったので教授も上機嫌で、ライブでの出来事をネタにしてジョークをバンバン言っていました。それでいて早く打ち上げに行きたいのか、手技はいつも以上に速く、自分の方はそのサポートが大変でもありました。よく考えたら、こちらに着任した最初の頃は他のみんなが笑っている時があっても、なにがおかしいのか全く分からなくて少し寂しかったのですよね。今は手を動かしながら、ドイツ語のジョークで笑えるようになってきている。自分の成長を少し感じて、改めてドイツに来て良かったなと思いました。

次回は、こちらの春の様子を伝えられたらいいなと思っています。それではまた(Bis bald!)

※ハイブリッド手術室…最先端のX線血管撮影装置(画像診断)とクリーンルーム(手術室)を融合させた医療施設。

地域に提供  
2026年2月24日

## 備蓄食の有効利用



近森病院では、災害に備えた備蓄食を定期的に入れ替えており、今回の入れ替えに伴い、まだ安全にお召し上がりいただける「おかゆ」1,720食を、高知市社会福祉協議会様、高知食糧ネット様へ寄付しました。

今回寄付させていただいた品物は、子ども食堂やサポートメンバー(生活にお困りのご家庭)へ届けられます。



## 歳時記

## 保育室そるとのお別れ遠足 (3月7日)



西島園芸団地へ行ってきたよ!



# 退職

ごあいさつ

近森病院 救急科

久 雅行 ひさ まさゆき

在職 2015.4.1~  
2026.3.31

Farewell  
for a while,  
comrades



## 近森育ちでほぼ11年

このたび、2026年3月をもちまして退職することとなりました。私は初期臨床研修医として近森病院に就職し、そのまま後期研修医として病院に残り、ほぼ11年間まるまる近森病院で勤務してきました。当初はそれほど長く働くことになるとは自分でも予想していませんでしたが、今振り返って考えてみると、他の場所で働く理由が見つからなかったのだと思います。

## 近森の魅力

医師にとって近森病院の魅力とは、医師の層の厚さや豊富な症例数はもちろんですが、なんとと言っても医師以外の医療スタッフの素晴らしさです。看護師、救命士、薬剤師、放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士、理学療法士、言語聴覚士、作業療法士、ソーシャルワーカー、管理栄養士、事務、クラークなど、日常の業務で

関わるすべての職種の方々に育ててもらったお陰で今の自分があります。長い年月で様々な部門のスタッフと信頼関係が生まれ、仕事やよさこいを通じて個人的な付き合いも生まれ、近森病院で共に働く人達は今や自分にとって戦友となりました。自分は今、本当に働きやすい環境にいると実感しています。

## 新しい再出発

ではなぜ退職するのか?色々あります。井の中の蛙になることを恐れたのもあり、自分の実力を県外で試してみたいという気持ちもありました。ただ一番の理由は、つい最近2人目の子供が生まれ、子供の教育や将来を優先したいと考えようになったからです。これからは人生の脇役として、新たな環境で再出発をしようと決意しました。大川筋では桜が咲いている頃でしょう。いずれまたお会いする日まで。Farewell for a while, comrades.

神戸フリータイムと  
新春バーゲン  
プレミアムアウトレット

2026年1月18・19日



2025年度  
職員旅行



フリー+  
東京ディズニーリゾート 3班  
(1dayパス付)  
2026年1月25・26日

危機管理部 部長  
**三谷 仁志**  
みたに ひとし

在職 2021.4.1~2026.3.31

## 平穏な 医療環境を 目指して

### 2度目の定年退職

今春、人生2回目の定年退職を迎え危機管理の仕事の後任に引継ぐこととなりました。近森会でお世話になった5年間、多職種の方々に助けていただきながら、何とか与えられた職務を全うすることができたのではないかと考えています。

もちろん、個々の事案を振り返ってみますと、こちらの思いが届かず訴訟に発展した事案や考え方の相違から喧嘩別れとなった事案もあるなど、力不足を感じることもありました。

### 病院という特別な現場

しかしながら、これらの困難な事案に対応させていただいたことにより、医療に関することを始め、様々なことを学ぶことができ

たほか、近森会の皆さんと共に問題解決に取り組むことができたことは、私にとって大きな財産となりました。

### 高知県の医療を支え続ける皆さんへ

ペイシエントハラスメントをはじめ、医療を取り巻く環境は益々厳しくなろうかと思いますが、近森会の皆さんにおかれましては、チーム医療によって高知県の医療を支えていただきたいと思います。

最後になりますが、近森会の益々の御発展と皆さんの御多幸を祈念申し上げ、お礼の言葉とさせていただきます。皆さん、本当にありがとうございました。



## 看護学校通信

### 先輩の姿を力に

近森病院附属看護学校 2年生 自治会委員長 **藤川 沙莉**  
ふじかわ さり

**第**9回壮行式を終え、3年生の皆さんの強い決意と団結力を改めて感じました。国試前には友達同士で勉強する様子が見られ、壮行式での出発前には円陣を組み、心を一つにする姿がとても印象的でした。当日は緊張しながらも「絶対合格する」という気持ちが表情や言葉

から伝わり、3年生の絆の深さを実感しました。病院の方々や先生方、在校生に見守られながら受験地へと出発する先輩方は、とても頼もしく感じられました。来年は私たちが受験する立場になります。先輩方の姿を胸に刻み、日々の学習を大切に積み重ねていきたいと思っています。



学近  
ぼ森  
うで、

**OPEN CAMPUS**  
2026 **4/26** SUN  
日

詳細は [近森看護学校](#) で検索、  
または右のQRコードより公式ホームページ  
をご確認ください。  
社会人や保護者の方の  
参加も大歓迎です。





## リレーエッセイ

### 約10年ぶりのピアノ演奏

電子カルテ管理課 岡崎 祐希 おかざき ゆうき



私は3歳から12歳までピアノを習っていましたが、当時は課題曲に取り組むことが中心で、ピアノを弾くことを心から楽しんでおらず、13歳以降は約10年間ほとんど弾いていませんでした。しかし昨年、院内で演奏活動をしている「お昼音アンサンブル」から伴奏の依頼をいただいたことをきっかけに、再びピアノに向き合うことになりました。

最初は思うように指が動かず、吹奏楽出身ではないので、周囲の音を聴きながら演奏する難しさにも苦勞しました。しかし、自分の演奏を聴いてくれる



人がいることや、日に日に上達していく実感が大きな達成感となりました。現在は18年間使用した電子ピアノを買い替え、好きなクラシック曲を弾くことや、さまざまなピアニストの演奏を聴くことが趣味になっています。特に好きな曲は、ショパン作曲の「スケルツォ第2番」です。みなさんのおすすめのピアノ曲があれば、ぜひ教えてください。



## 私の趣味

### オンでもオフでも “文具女子”満喫中

近森リハビリテーション病院  
4階病棟 看護師

中谷 美乃里 なかやみのり



私の趣味の一つが、文房具やシール、マスキングテープなどを集めたり使用したりすることです。日記やシールなどが好きな姉に誘われて「文具女子博」へ行ったのがきっかけでした。会場では全国の有名な文具店や海外のシールを取り扱っているお店などがあり、たくさんの種類の文房具やシールなどを見ているうちにいつの間にかハマっていききました。今では母も一緒になって文具店や百貨店でシールを買ったり、文房具などのイベントが高知で開催された時は、家族3人で予定を調整して出かけたりしています。県外に旅行へ行った時は、家族や職場のお土産として文房具を買ったりしています。



最近のお気に入り、先輩から頂いたくまのプーさんのボールペンです。今年から継続して何かに取り組みたいと思い、毎日一言日記をつけるようになりました。B5サイズの日記帳にぴったりなサイズで、大好きなプーさんも相まって見るたびに癒されています。

職場では使い勝手がいいものや文字の書きやすさ、自分の好きなメーカーのものなどに当てるボールペンを使用しています。今後も、自分の好きな文房具を仕事に対するモチベーションを保つツールとして活用していきたいです。



FREE

私の○○

まるまる ○○にフリーワードを入れて  
語っていただきました

### 私の「静かな推し活」

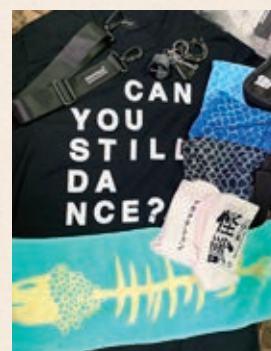
臨床検査部 生理検査室

水田 綾香 みづたあやか



ラジオをよく聴いていた学生時代、とても耳に残る曲が流れました。サカナクションというバンドの『ワード』という曲です。

この日を境に、私の「推し活」が始まりました。とはいえ、毎回ツアーに追い詰めるのではなく、四国内に来た時に足を運び、チケットが取れなければ潔く諦める、そんな自分なりの推し活です。



そして何より、グッズがとても素敵です。デザインが好みというだけでなく、日常に溶け込むものが多いので、職場やプライベートでもたくさん身に付けています。

ボーカルの山口一郎さんの療養を経て、2024年から本格的にバンド活動が再開されました。昨年の全国ツアーでは、私自身も久しぶりに香川公演へ参加

することができました。配信などでライブが身近になった今ですが、やはり生演奏に勝るものはないと改めて実感しました。

これからも、胸のうちは熱く、スタイルは私らしく、推し活を楽しんでいきたいと思っています。





# ユネスコ世界文化遺産 「紀伊山地の霊場と参詣道」 吉野千本桜



4月上旬、京都鴨川沿いのザ・リッツ・カールトン 京都で1泊し、奈良の吉野山をぶらりと巡ってきました。吉野千本桜は約200種、3万本もの桜が山全体を彩り、その美しさは「一目千本」と称されます。下千本、中千本は満開でしたが、上千本、奥千本は4月中旬からになりそうです。

ちなみに、吉野千本桜は何のために植えられ続けたのでしょうか？「花見」のためではありません。

(答えは14ページの下)



▲ 鴨川、二条大橋畔の桜。



▲ 中千本から下千本を望む。

◀ 下千本の「一目千本」。



▲ 中千本、今が盛りです。



◀ 中千本を歩いて金峯山寺へ。



**県内初!**  
**日本赤十字社**  
**献血推進特別賞**  
**受賞**

2026年2月17日

近森病院では日々血液を使用する三次救急の医療機関として、血液の安定供給への感謝を込め、全職員対象の献血活動を年3回、各50名以上の参加を目標に継続してきました。この取り組みが評価され授与いただきました。



前列左より、高知県赤十字血液センター事業部長 谷崎光広様、近森相談役、入江理事長、後列左より、高知県赤十字血液センター事業部献血推進課長 小野卓二様、寺田管理部長

## 編集室通信

「ひろっぱ」は職員の皆さんの協力できています。例えば職員旅行の写真も、皆さんのご厚意で頂いています。今回私もTDRの回に参加したので、写真を撮ってきました。楽しそうな写真をお願い、同行者に何枚も撮ってもらいましたが、寒さで鼻が赤かったり移動で髪が乱れたり、結果は苦戦の1枚。いつもご協力くださる皆さんに本当に感謝です！ ざさち

## 診療数 2026年2月

— 電子カルテ管理課 —

### ● 近森会グループ

外来患者数 ..... 15,452人  
新入院患者数 ..... 1,035人  
退院患者数 ..... 1,026人

### ● 近森病院(急性期)

平均在院日数 ..... 11.50日  
地域医療支援病院 紹介率 ..... 104.61%  
地域医療支援病院 逆紹介率 ..... 394.74%  
救急車搬入件数 ..... 495件  
うち入院件数 ..... 289件  
手術件数 ..... 569件  
うち手術室実施 ..... 348件  
うち全身麻酔件数 ..... 242件

# 永尾 彰大

Akihiro Nagao

近森病院 臨床工学部  
臨床工学技士

聞き手／ひろっば編集部



## チーム内に 阿吽の呼吸を 命と向き合う エンジニア

昨年度、近森会グループMVPの個人部門を受賞した永尾臨床工学技士。受賞理由は、「優れたCAG介助(※)と、明るい雰囲気、現場の士気を高めチーム医療に貢献したこと」。受賞時の感想を聞くと「これはチームみんなで取った賞」とチーム連携の強さを強調された。

### 現場の熱を冷静に読み解く、「セカンド」という重責

永尾さんの主戦場はカテーテル室。なかでも、心臓カテーテル治療において、医師の隣で手術を支える「セカンド」という重責を担う。この役割は職種を問わず担えるが、近年は医療機器のスペシャリストである臨床工学技士への「タスクシフト」が進んでおり、先駆的な近森病院において、「セカンドは永尾で」と医師から指名が入るほど信頼を得ている。

「一刻を争う心筋梗塞のオペなどでは現場が緊迫し、どうしても熱くなりがちですが、そういう時こそセカンドとして僕は誰よりも冷静であることを心がけています」。モニターの数値、スタッフの動き、さらに場の空気を読み取って、医師の求める「次の一手」を先回りする。専門知識だけではない、いわゆるノンテクニカルスキルこそが、永尾さんのすごさなのだろう。

「難しいオペになればなるほど、結集するスタッフそれぞれが、その分野のスペシャリストであることを実感します」。取材中は幾度となく、チームメンバーへの尊敬の言葉が

※CAG介助…狭心症や心筋梗塞といった心臓の病気に對し、医師がカテーテルを動脈から心臓に誘導して検査や治療を行う際、必要な医療機器を準備したり、医師の隣で手技が円滑に進むように補助行為を行うこと。

聞かれ、一緒に仕事ができることに誇りを持っていることがよく伝わってきた。

### 自然のなかで、思うがままに

出身は四万十町大正。小学校時代は、夏になれば川に飛び込んだり、山に入っては秘密基地作りに没頭する日々を過ごした。目的もなく自転車を走らせ、気がつけば隣のダムまで辿り着いていたこともあり、よく親を呆れさせていたと懐かしむ。「道があるから、その先を見たい」。豊かな自然に囲まれ、純粋な好奇心のままにのびのびと過ごした少年時代だった。

高校からは兄の背中を追い、高知高专へ。周囲と同じく企業への就職も考えたが、その頃は就職氷河期の真っ只中。「やはり資格を持ち、手に職をつけなければ」という現実的な考えが芽生えた。もともと機械をいじることは好きだったが、その興味は次第に、「医療機器を通して直接、誰かの役に立ちたい」という志に変わり、臨床工学技士の道を選ぶに至った。

### 妻のための専属シェフ

プライベートでは2年前に結婚。現在は同じフロアで働く臨床検査技師の妻と二人暮らしだ。永尾家では、「早く帰った方が夕飯を作るのがルール」だが、永尾さんが台所に立つ方が多い。

「妻はケチャップ味とかが大好きなんです」と話す目尻は下がりがちなしだ。職場のクールな仮面はどこへやら。豆腐や春菊が苦手な妻のために、かき揚げにして苦味を消したり、白和えにして形状を変えて食べさせたり。今は、「とにかく妻に美味しくごはんを



永尾さんの手料理はどれも妻への愛情がたっぷり詰まっている。

食べてもらうこと」が一番の趣味だという。プロポーズの際にバラの花束を贈ったというエピソードも含め、聞いているこちらが赤面するほどに幸せに包まれているようだ。

### グレーを白へ変える、臨床工学技士の未来への使命

近森病院の臨床工学技士が扱う症例数は、年間一人あたり約200件にのぼる。これは一般的な病院の心臓カテーテル治療の年間件数にも匹敵する多さだ。恵まれた環境で研鑽を積んできた永尾さんの視線は、臨床工学技士の未来へと向く。

「医師の働き方改革が進むなか、法的グレーゾーンを解消し、技士が担える業務を標準化していくことは、地方病院の未来にとっても不可欠だと思っています。先輩から学んだセカンドとしての役割を、後輩にしっかり伝えていくことも僕の使命です」。

その言葉は、永尾さん一人の決意というよりも、チームの言葉のように響いた。スタッフ一人ひとりの高い技術と意識、信頼し合う団結力。これこそが近森病院のチーム医療の質を底上げしているのだと再確認することができた。

